

年間第六主日

2010.2.13

マタイ 5・17-37

今年の年間主日のミサではマタイ福音書に語られている順を追って、イエスの足跡をたどっています。先々週の日曜日から、私たちもイエスのみもとに集った人々や、弟子たちと同じように、イエスの語られるみことばに耳を傾けて来ました。マタイ福音書の5章から始まって7章の終わりまで続くイエスのこれらの一連のみことばは、山上の説教と呼ばれていて、今日聴いた福音もその山上の説教の続きの部分です。他の福音書には出てこないこの山上の説教の部分には、最初の教会に伝えられていたイエスのみことばを集め、一連のイエスの説教にまとめて示そうとした、マタイ福音書の作者の意図が働いていると聖書学の専門家たちは説明しています。そのような最初の教会の、後に続く世代のために福音書という書物を残そうとした努力のおかげで、私たちはイエスの教えをまとまった形で聴くことが出来るようになったのです。

伝えられたイエスのみことばを集め、それらを山上の説教にまとめたマタイ福音書を生み出した人々の意図は、今日の福音の最初に語られているイエスのみことばに基づいていると考えられます。もう一度、今日の福音の最初のイエスのみことばに注目すると、イエスはこのように語っておられます。「わたしが来たのは律法や預言者を廃止するためだと思っはならない。廃止するためではなく、完成するためだ。」マタイ福音書を生み出した最初の教会が私たちに伝えようとしているのは、このようなイエス・キリストへの信仰です。イエスは、旧約のモーセや預言者たちを通して示された神の掟が意味することに徹底的に従って生きることによってそれを完成させたお方です。イエスは御自分が生きられた神の掟に従って生きる道を私たちに示し、私たちをそのような生き方に招くためにこれらのみことばを語っておられるのです。

今日の福音で、モーセの十戒の中の一つ一つの掟のことばをあらためて指し示しながら、「しかし、わたしは言うておく。」と言われるイエスの語り方は、その内容について考える前に、人々に新鮮な驚きをもって受け止められたはずです。イエスの教えに耳を傾けた人々が、その都度感じたイエスの語り方の特徴がここでは、余すところなく示されているように感じられます。人々の心に残ったイエスの語り方の最も際立った特徴は、イエスが権威をもって語られるということです。マタイ福音書は山上の説教という形でイエスのみことばをまとめるに

あたって、自分たちの心に今も響く、イエスのみことばが放つ権威をこれ以上にはない形で強調します。このように十戒の掟の真の意味を解き明かすイエスの権威は、イスラエルの民に神からの掟としての十戒を示したモーセの権威を超えたものであるとマタイ福音書は主張しているのです。イエスのこれらのみことばを山上の説教としてまとめたことにもそのようなマタイ福音書の意図が示されています。イエスは今や、モーセを越えた権威ある者として、モーセがシナイの山で主なる神から十戒の掟を受けて、それをイスラエルの民に伝えたことを念頭において、山上の説教の場を設定しているのです。モーセを通して示された神の掟に従うと誓うことによって神の契約に与り、神の民とされた旧約のイスラエルの人々に替わって、今やイエスは、人々に十戒の掟の真の意味を解き明かすことによってそれを御自分の権威をもって確認し、新約の新たな神の民となる人々を、御自分との契約に招き入れようとしておられるのです。要するに、私たちが今日も聴いたイエスのこれらのみことばは、私たちにイエスへの信仰を要求しているのです。イエスを道、真理、いのちと信じる者たちにとって、イエスが語られるこれらのみことばは、イエスの思いに即して受け入れることが出来る新約の新しい掟となるのです。

これらのイエスのみことばが私たちに圧倒するのは、その激しい語調の一言ひとりに込められた、主なる神の掟に対する徹底的な肉迫ぶりです。主なる神の掟が求めていることに対する、日常生活の隅々にまで及ぶ徹底的な従順の姿勢です。イエスのこれらのみことばの前に、私たちは今日も自分自身を振り返らなければなりません。けれども、その私たちの反省は、イエスがここで命じておられことに従っているかどうかということに向けられるものではありません。むしろ、これほどの迫力をもって私たちに迫るイエスのみことばが私たちにどれほどの衝撃を与え、私たちのうちにどれほどの波紋となって広がっているかということこそが肝心なのです。

私たちは、私たちの力では到底従いとおすことが出来ないと思える、これらのイエスのみことばを聴いても、自分にはとても着いては行けないと諦めて、イエスのもとは立去ることなく、これらの要求を突きつけるイエスのもとに留まった者たちです。そのような私たちの中でイエスのこれらのみことばはどれほどの力を発揮しているのでしょうか。イエスは私たちにこれらの掟のもとに縛りつけ、これらの掟によって私たちに裁くために、私たちには到底完全には実行不可能と思われるこれらの掟を与えられたのではありません。繰り返しますが、イエスはひたすらに父なる神の御心を求め、それに従いとおされた神の子として

の御自分の生き方に私たちを招きいれようとしてこれらのみことばを語ってくださったのです。

イエスのこれらのみことばを、自分たちの普段の生き方とは対立する厳しい求めとして、私たちの心のどこかに反感を隠して聴くのではなく、イエスが求めておられるように、素直な柔らかな心で受け入れることが出来るためには、山上の説教のイエスの最初のみことばを思い起こさなければなりません。最初の幸いを告げるおことばの中で、イエスは「悲しむ人は幸いである。」と語りかけてくださいました。今日のイエスのみことばの前に立つ時、私たちの心にまず湧き起こってくる思いは悲しみでなければならないことを、イエスの最初のみことばは私たちに思い起こさせます。イエスが示してくださる新しい掟の道を知りながら、それに従いきれない悲しみを私たちはいつも自分のうちに感じていなければなりません。そのような悲しみに私たちが真に向かい合う時、私たちは心砕かれた者となり、心貧しきものとなることが出来るのです。そのようになれたとき、私たちはイエスが求めておられるように、お互い同士兄弟となって、自分の非を認め、ゆるしを乞う者となることが出来るのです。そうなることが出来れば、お互い同士和解しあうことが出来、私たちが本当に望んでいるはずの平和を実現してゆく道が開かれるのです。自分の正しさを擁護してくれる神を求めて、誓いによって神を引き合いに出してでも自分の正しさを主張するのではなく、神の大いなる憐れみの広がりの中に生きる者同士であることに目覚め、互いに兄弟同士としての平和のあいさつを交し合う者たちとされてゆくのです。そのためにも心清きものとなってひたすらに神に目をあげ、その視線を曇らすものは、なんであれえぐり出し、切り捨てる覚悟をもって、イエスが招く神の子らの生き方に合流して行きたいと思えます。イエスが求めておられる生き方に反していることに気づくたびに、深い悲しみの中にも、そのことによって自分の小ささ、自分の貧しさに気づかせていただけたことに感謝し、真の幸いを約束するイエスの掟のもとに生きる喜びを噛み締めてゆく恵みを願いたいと思えます。

カトリック高円寺教会  
主任司祭 吉池好高